



JACET北海道支部2018年度第1回支部研究会

天使大学

2018.11.18.

**日本の英語教育研究が行ってきたこと、
こなかったこと：
方法論から考える**

浦野 研（北海学園大学）

email: urano@hgu.jp

<https://www.urano-ken.com/research/jacethokkaido2018>

はじめに

「研究」 とは何か

研究 (research) とは

***Research* is a **systematic** process of inquiry consisting of three elements or components:**

- a. a **question**, problem, or hypothesis**
- b. **data**, and**
- c. analysis and **interpretation** of data**

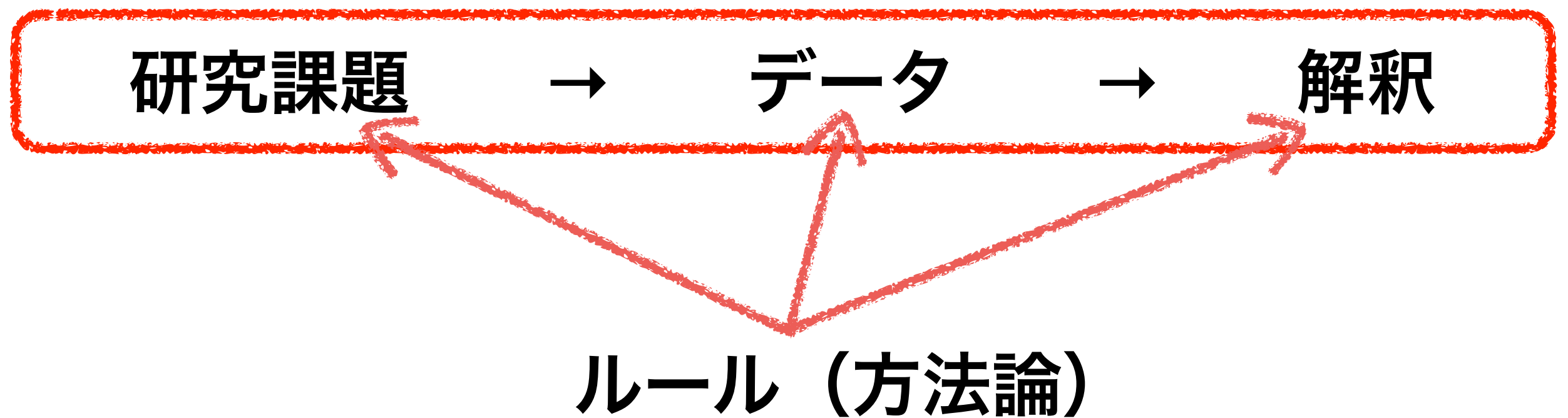
(Nunan, 1992, p. 3)

研究 (research) とは

question → data → interpretation

systematic

研究 (research) とは



研究（research）とは

- 研究とは、研究課題（問い）を設定し、根拠となるデータを集め、その答えを導き出す営み
- 上記の3要素それぞれについて一定の約束ごとがある

研究の目的 (goal)

- 研究成果をどこに還元するか
 - 教師（研究者）個人
 - 英語教育（研究）分野全体

研究の目的 (goal)

- 教師個人への還元を目指す
- 実践としての研究
(practitioner research)
- 分野全体への還元を目指す
- 学術的な研究
(academic research)

研究の目的 (goal)

- 実践としての研究の目的
 - 自分の生徒たちについての理解を深め、実践上の問題を解決する
- 教師としての成長

研究の目的 (goal)

- 例：
 - 試行錯誤の結果、自分の授業がうまくいくようになった
 - 生徒がやる気を見せるようになった
 - 自分の担当クラスの成績が上がった

研究の目的 (goal)

- 学術的な研究の目的
- 英語教育（研究）分野全体を一步前に進めるための貢献
 - 自分のクラス以外でも役立つ知見
 - 他の文脈でも当てはまる知見

研究の目的 (goal)

- 実践としての研究と学術的な研究
 - 優劣はない
 - 目的が異なり、方法論が異なる

実践としての研究



- リフレクティブな英語教育を目指して：教師の語りが拓く授業研究（ひつじ書房）
- 実践としての研究の方法論や事例を収録

実践としての研究

- よりよい実践研究を行うための10のポイント（藤田, 2016）
- 実践研究を行うためのポイントの整理と事例の紹介

<https://drive.google.com/file/d/0B-OpnEJKrYAdQzNRb1pDY0pQaUE/view>

第44回やまがた区立教育大会 研究センター 2019年9月26日(日)
よりよい実践研究を行うための10のポイント
藤田 孝洋（富山大学教育学部）
E-mail: tsukasa519@gmail.com / WEB: <http://www.tsukasa-fujita.com>

POINT1 研究には多様な形があることを知る

1.1 様々な形での実践研究
表1. 研究の多様性

研究	目的	データ収集方法	データタイプ	データ分析	結果	研究
Grant & Gipeck (2000)	教師の信念や実践	観察	テキスト	内容分析	教師の信念は、実践に反映している	教師の信念と実践の関係
本木 (2011)	国語学習者の学習態度	調査	調査票	統計分析	学習者の学習態度は、教師の指導によって変化する	教師の指導と学習者の学習態度の関係
Grant & Shere (2004)	教師の信念や実践	観察	テキスト	内容分析	教師の信念は、実践に反映している	教師の信念と実践の関係
千田 (2016)	学習者の学習態度	調査	調査票	統計分析	学習者の学習態度は、教師の指導によって変化する	教師の指導と学習者の学習態度の関係

Note. AR = アクション・リサーチ (action research)

1.2 実践研究とは何か

1) 日本教育学会：授業の計画、実施、評価の改善、教師の自己研鑽

「自身の教育実践に基づいた問題の発見・分析を行い、改善の過程で得られていることを体系的なデータによって検証することによって、自身の実践の改善を図り、次の実践へとつなげるプロセス」(中略 2009, p.16)

2) 小澤孝：実践に資する研究とは実践を基盤として行われる研究 (2008)

■ 実践を基盤とする研究：「実践に基いて実践を改善するための研究」(小澤, 2008, p.14)

■ 実践に資する研究：実践を基盤とする研究を基盤として行われる研究 (小澤, 2008, p.14)

3) 小澤孝：実践研究とは何か？実践を基盤とする研究とは何か？(小澤, 2008, p.14)

・ アクション・リサーチ (action research)：実践の改善 (classroom research, teacher research, practitioner research)

・ アクション・リサーチ (action research)：実践の改善 (classroom research, teacher research, practitioner research)

1.3 小澤孝と実践研究の定義 (2010) & teacher research

This defines teacher research as systematic inquiry, qualitative or quantitative, conducted by teachers in their own professional contexts, individually or collaboratively (with other teachers and/or members of school staff), which aims to enhance teachers' understandings of some aspect of their work. It, more broadly, has the potential to contribute to better quality teaching and learning in individual classrooms, and which may also inform institutional improvement and educational policy more broadly (Borg, 2010, p. 2250)

学術的な研究

- 研究成果を分野全体に還元するために
 - 自分の研究と他の研究（先行研究）との関係を明確に示す
 - 研究結果が他の文脈に転用（応用）可能になるための手続きを踏む

研究の3要素

研究課題

データ

解釈（答え）

研究課題の設定方法

1. およその研究テーマを決める
2. 興味・関心、研究価値、実行可能性を検討する
3. 関連する研究（先行研究）を集め、読み、まとめる

研究課題の設定方法

1. およその研究テーマを決める
2. **興味・関心、研究価値、実行可能性**を検討する
3. 関連する研究（先行研究）を集め、読み、まとめる

研究課題の設定方法

- 興味・関心
 - やりたいこと
- 研究価値
 - やるべきこと、求められていること
- 実行可能性
 - やれること

研究課題の設定方法

- 先行研究のまとめ
 1. 研究テーマがどのような切り口で扱われてきたか
 2. 何が調査され、何が判明し、何がわかっていないか
 3. 理論的欠陥、方法論的問題はないか

研究課題の設定方法

- **よい研究課題**
 - **先行研究で重要だと指摘されているのに十分調査されていないもの**
 - **先行研究に問題があり、それを解決するもの**

研究の種類

種類	アプローチ	目的	探索／検証
文献研究		1. 先行研究を整理し内容を検討する	
実証研究	質的研究	1. 文脈を考慮して事象を捉える	探索型 ↑ ↓ 検証型
		2. 文脈を考慮して参加者の変容を捉える	
		3. 参加者の経験や認識を捉える	
		4. 先行研究の対象外の事象を明らかにする	
		5. 研究の信憑性を高める	
	量的研究	1. 事象の特徴や傾向を量的に記述する	
		2. 事象の関連性を捉える	
		3. 事象の差異や因果関係を捉える	

浦野他 (2016, p. 8)

探索と検証

- **探索型の研究**
 - **先行研究が蓄積されていないテーマ**
 - **観察や聞き取りなどにより丁寧にデータを収集し、その中から何らかの方向性を見出すことを目指す**

探索と検証

- **検証型の研究**
 - 先行研究が蓄積され、結果についてある程度予測の立てられるテーマ
 - 「仮説」を設定してそれを検証する

研究課題のレベル

研究課題のレベル	研究課題の形式	研究課題の種類
レベル 1 : 「何」を問う課題	〇〇とは何か？	探索型
レベル 2 : 関連性を問う課題	AとBには関連があるか？	探索型・検証型
レベル 3 : 因果関係を問う課題	Aを行うとBが生じるか？	検証型

浦野他 (2016, p. 67)

データと解釈

- 研究課題に合ったデータを集める
- データの種類に合った分析・解釈を行う

データ収集法

- 事例研究 (case study)
 - 観察や聞き取りにより深く調査する
- 調査研究 (survey study)
 - 介入を行わずにデータを収集する
- 実験研究 (experimental study)
 - 介入を行いながらデータを収集する

分析・解釈

- データ分析とは、集めたデータを解釈可能な形に要約すること
- データの種類によって要約方法が異なる

データの種類

- 質的データ
 - フィールド・ノートやインタビューの文字起こしなど、数値化を伴わない（言語）データ
- 量的データ
 - 調査対象を数値によって表したデータ

データの要約

- 質的アプローチ
 - 質的データを**意味的**に要約する
- 量的アプローチ
 - 量的データを**統計的**に要約する

質的アプローチ

- データ分析と解釈
 - 分析と解釈を行き来する
 - コーディングとカテゴリー化
 - 文脈の重視と厚い記述
(thick description)
 - 転用可能性 (transferability)

質的アプローチ

- データ収集法、分析法ともに多様
- 方法論の理解には、実際の研究に多く触れることが必要
- 浦野他（2016）の第5章を参照
（研究事例も含めた解説がある）

量的アプローチ

- データ分析
 - 記述統計と推測統計
 - 無作為抽出、無作為割付の重要性

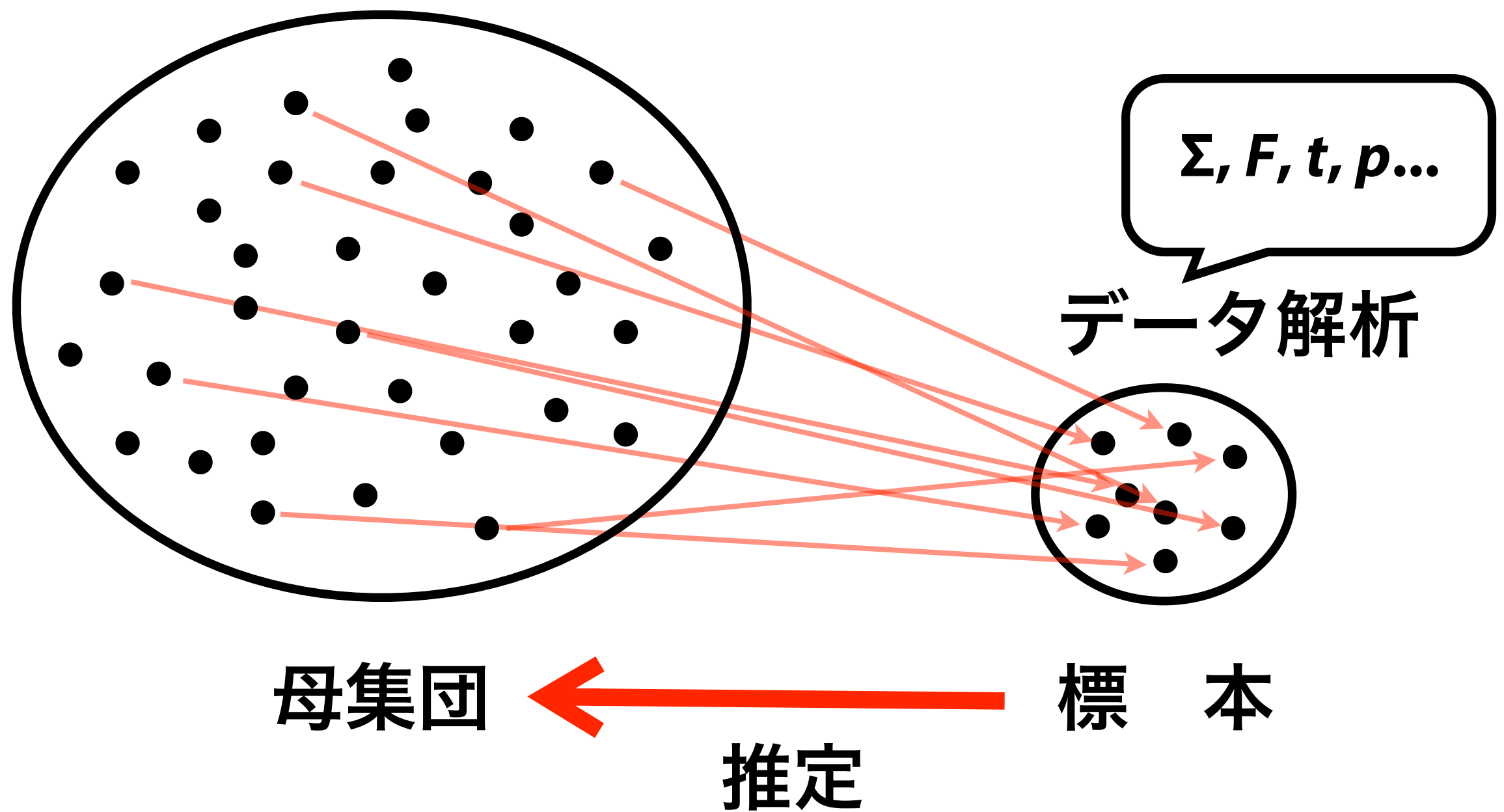
推測統計（有意性検定）

- 目の前のデータ（標本）からより大きな文脈（母集団）を推定する
- 標本で観察される差・関係が、母集団からの標本抽出時の誤差で生じる確率（ p 値）を計算する
- p 値が基準値（臨界値）以下であれば「有意」である（誤差ではない）と判断する

推測統計（有意性検定）

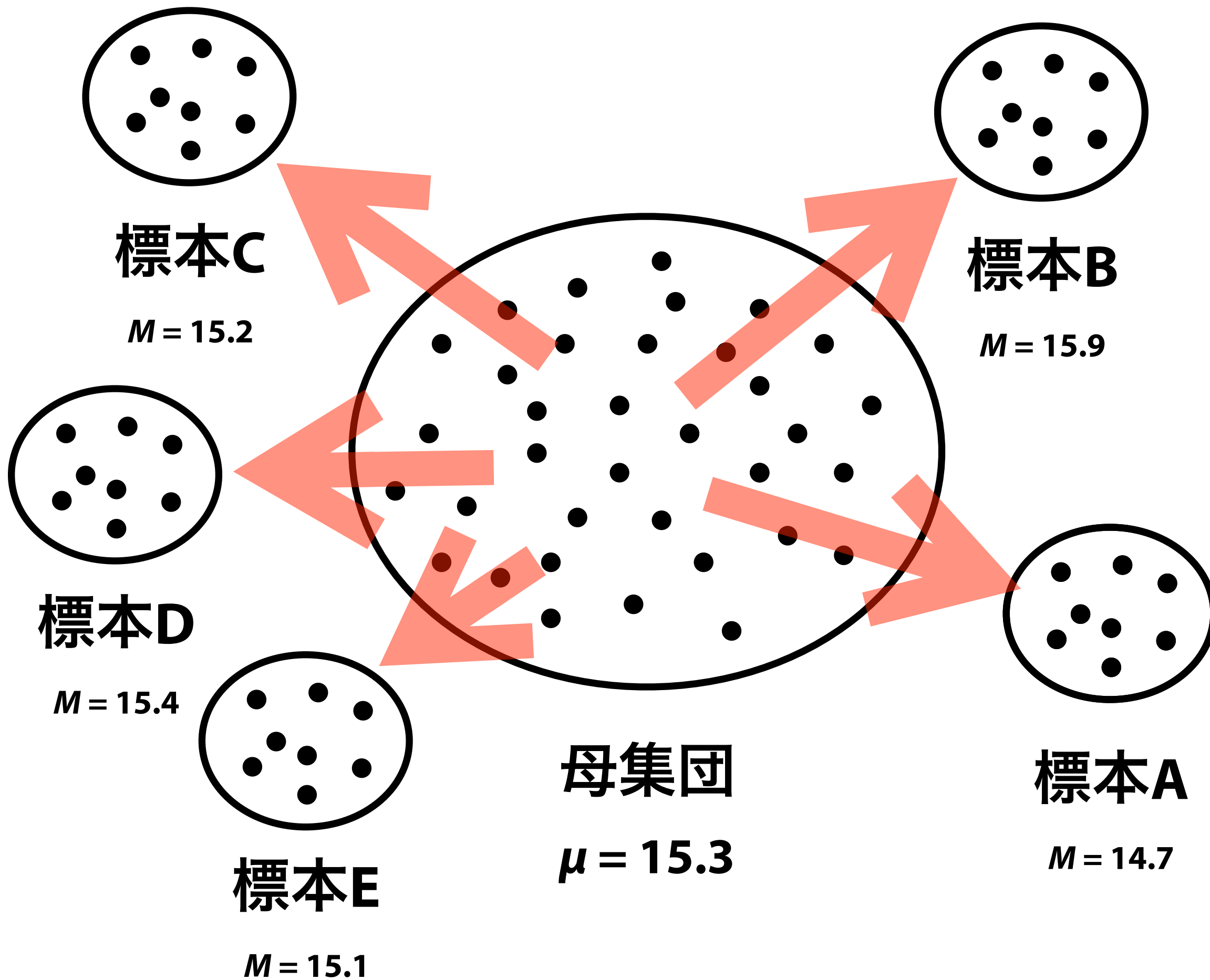
- 相関分析の場合、標本で見られる相関が無相関（相関ゼロ）の母集団からの標本抽出時の誤差で生じる確率（ p 値）を計算する

母集団と標本

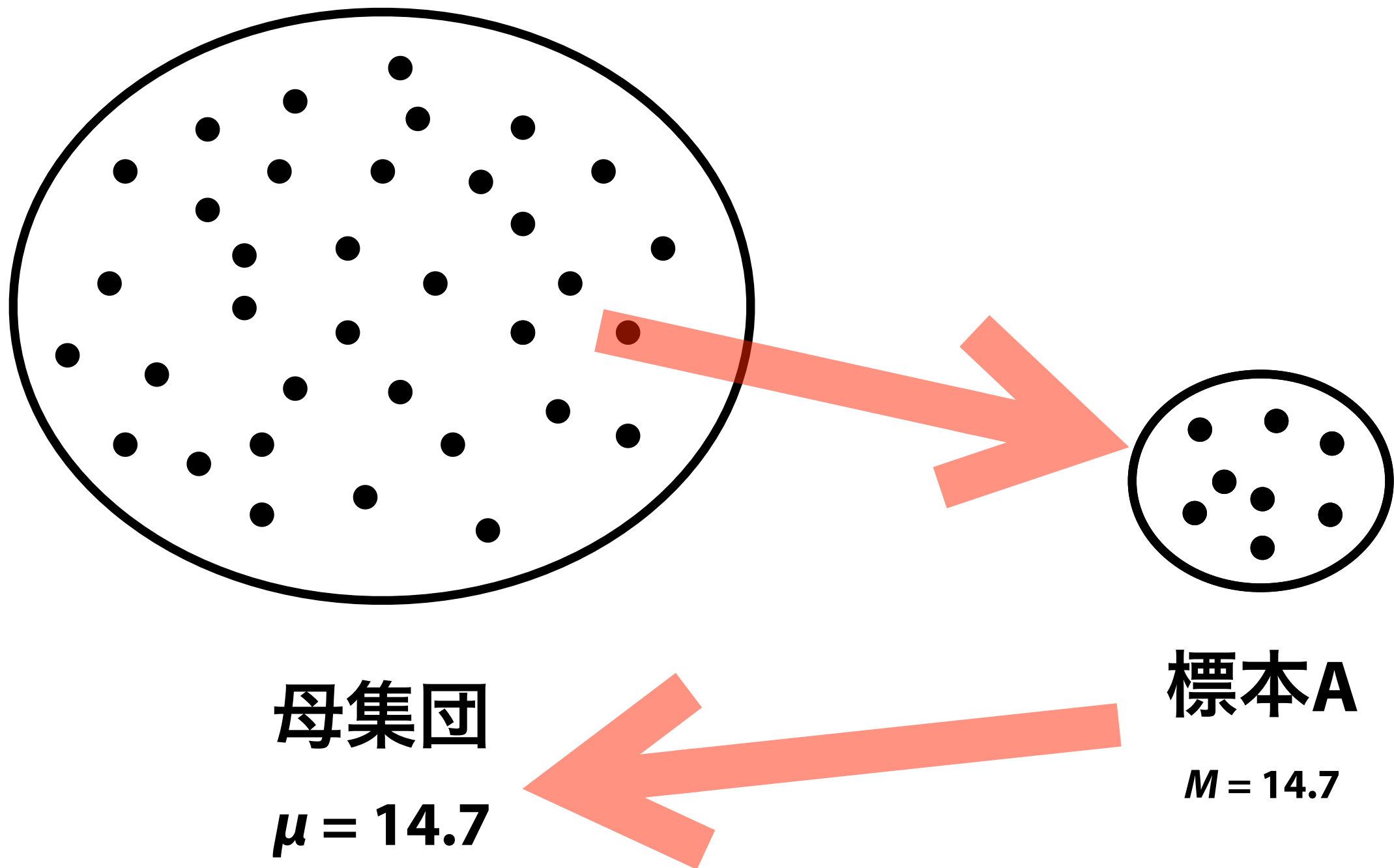


標本誤差

- ある**標本**で得られた代表値（e.g., 平均）
と**母集団**の代表値との**差**



実際は $M = \mu$ として推定



標本誤差

- 標本のサイズが**大**きければ大きいほど、
標本誤差は小さくなる
- つまり推定の**精**度が高くなる

無作為抽出・無作為割付

- 無作為抽出 (random sampling)
 - 標本から母集団を推測することが可能なのは、無作為抽出のおかげ
- 無作為割付 (random assignment)
 - 複数のグループを作るとき、無作為割付によってグループ間の等質性を担保する

無作為抽出・無作為割付

- 問題点
 - 英語教育における量的研究の大半は、無作為抽出を行っていない
 - 実際のクラスを使う準実験研究では、無作為割付も行われない

無作為抽出・無作為割付

- 研究結果の一般化可能性（generalizability）が担保されていない
- 研究結果を他の文脈に転用（応用）可能にするという、学術的な研究の大前提が満たされていない

ここまでのまとめ

ここまでのまとめ

- 研究成果の個人への還元を目的とした実践としての研究
- 研究成果の一般化を目的とした学術的な研究

ここまでのまとめ

- 学術的な研究の2つのパラダイム
 - 量的アプローチ（広く満遍なく探る）
 - 統計的要約：一般化可能性
 - 質的アプローチ（深く細密に探る）
 - 意味的要約：転用可能性

本題

本題

**日本の英語教育研究は
これまで何を行ってきたか**

本題

全国英語教育学会（JASELE）の場合
Mizumoto, Urano, and Maeda (2014)

Mizumoto et al. (2014)

- 全国英語教育学会紀要 *ARELE* の第1～24号に収録された全論文473本のうちオンラインで公開されている450本を分析

Mizumoto et al. (2014)

- 英語タイトルと要旨のキーワード分析
 - 総語数79,143、異語数5,152
 - 合計頻度上位300語を対象にクラスター分析
 - 前半12号と後半12号にきれいに分かれる

Mizumoto et al. (2014)

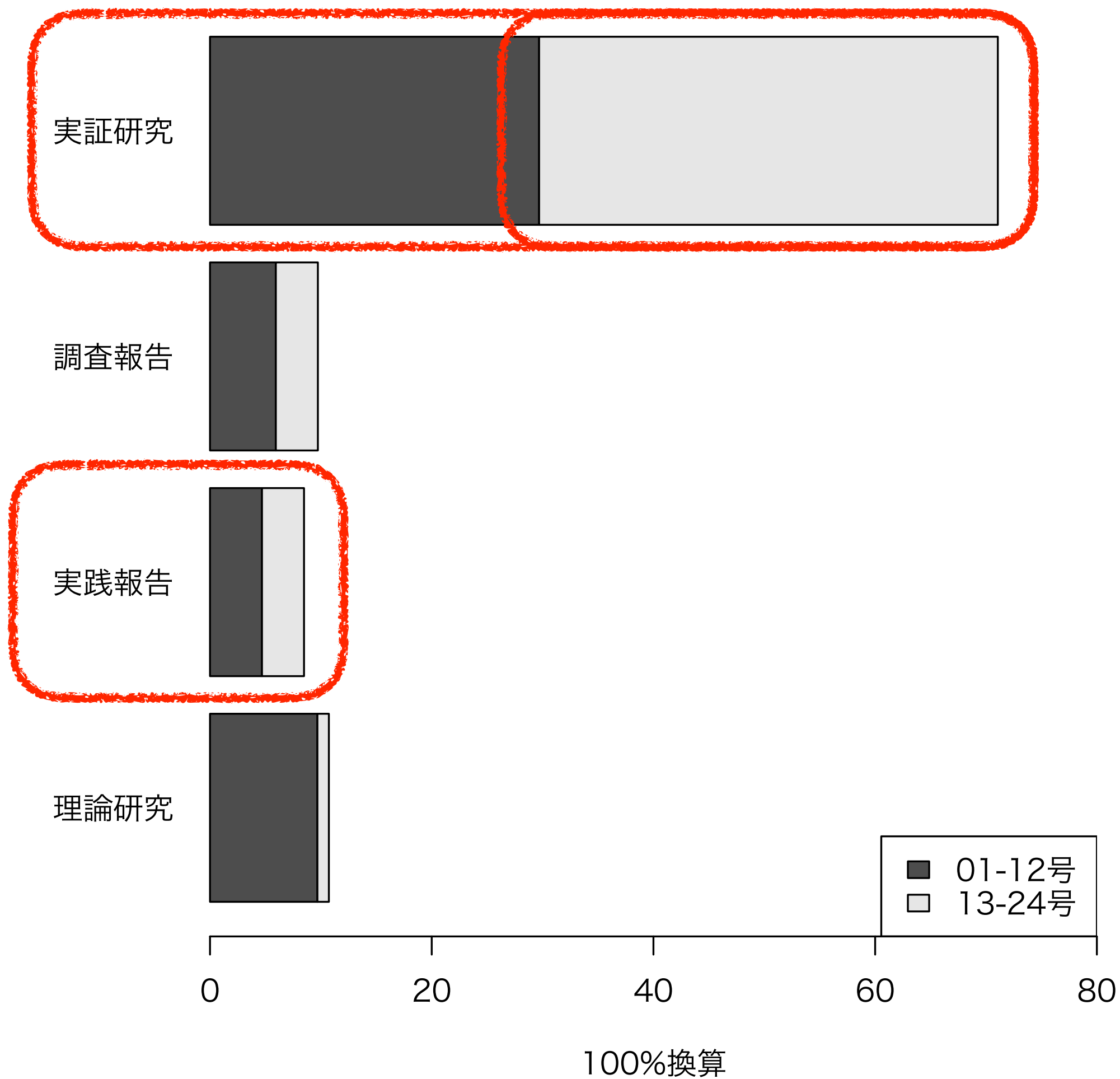
- 前半12号と後半12号を比較
 - テーマとトピック
 - 研究手法
 - 効果量と検定力

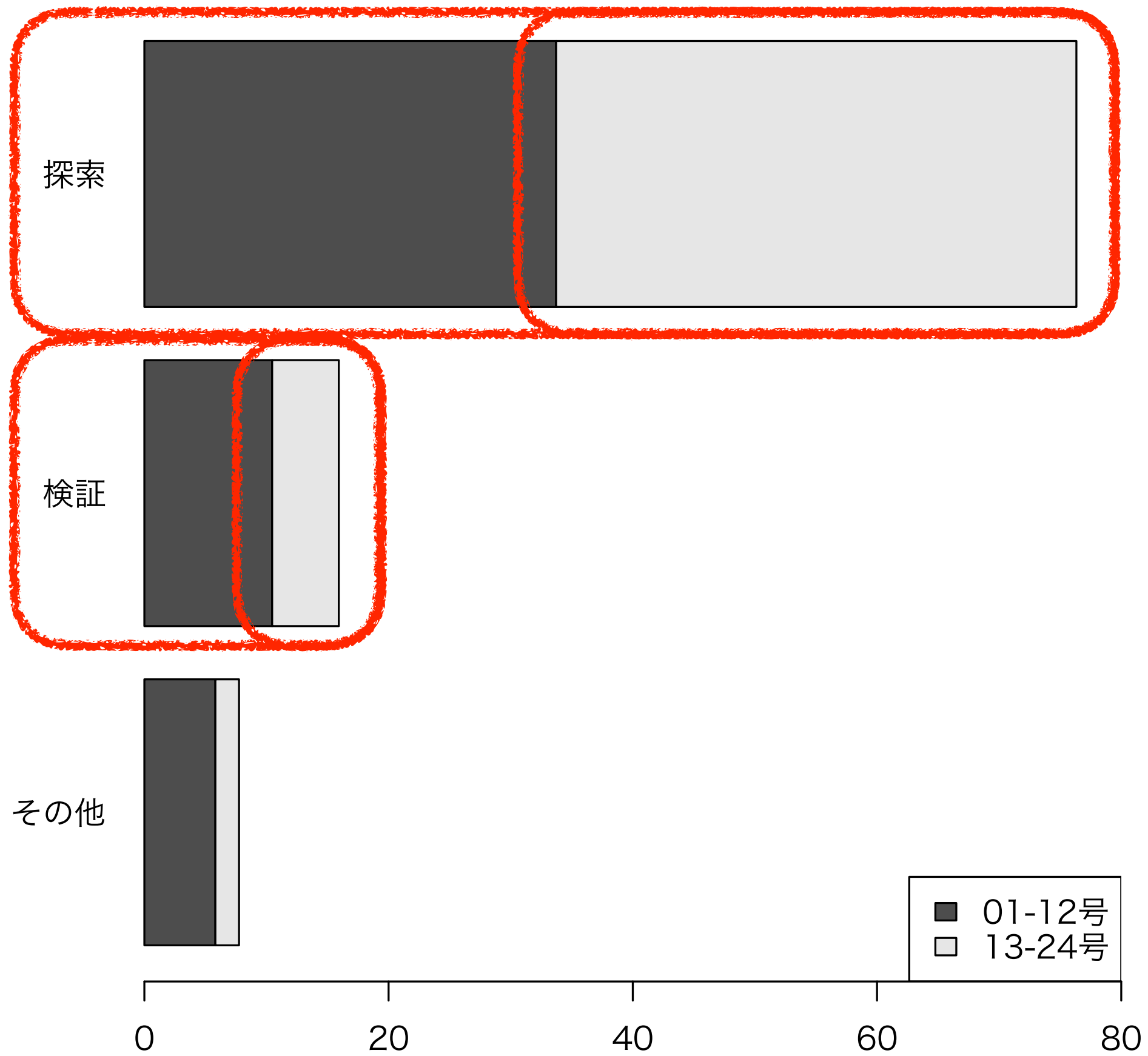
Mizumoto et al. (2014)

- 前半12号と後半12号を比較
 - テーマとトピック
 - 研究手法
 - 効果量と検定力

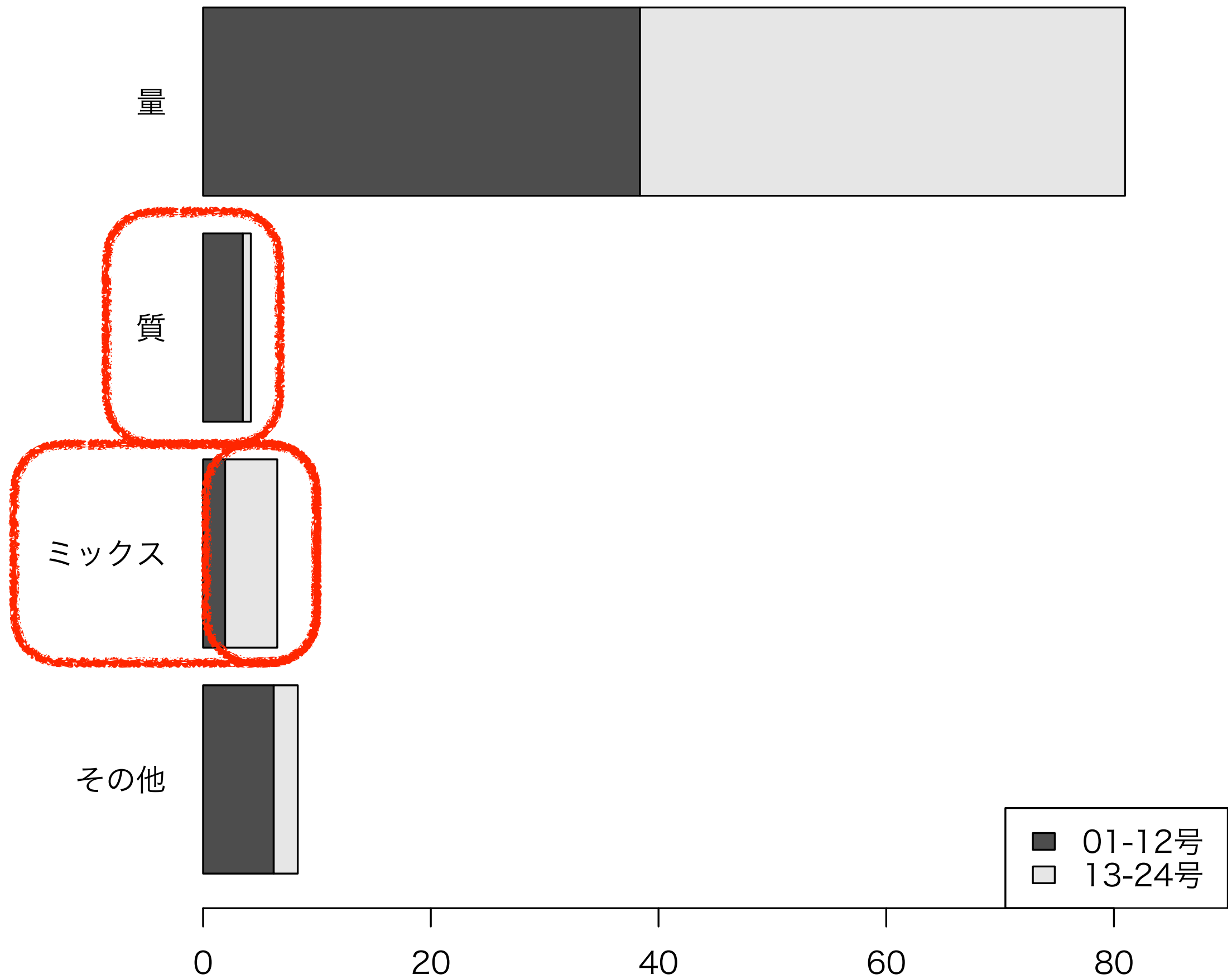
Mizumoto et al. (2014)

- 研究の種類（実証・調査・実践・理論）
- 研究の目的（探索・検証）
- アプローチ（量・質・混合）
- 介入（有・無）

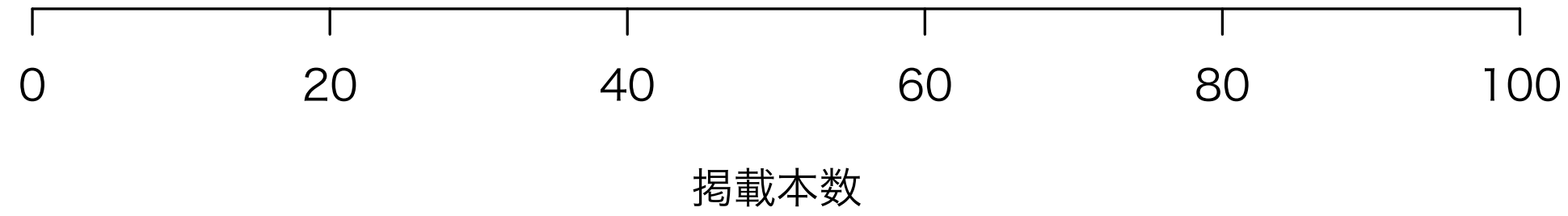
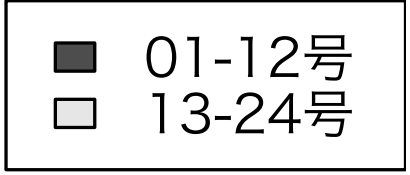
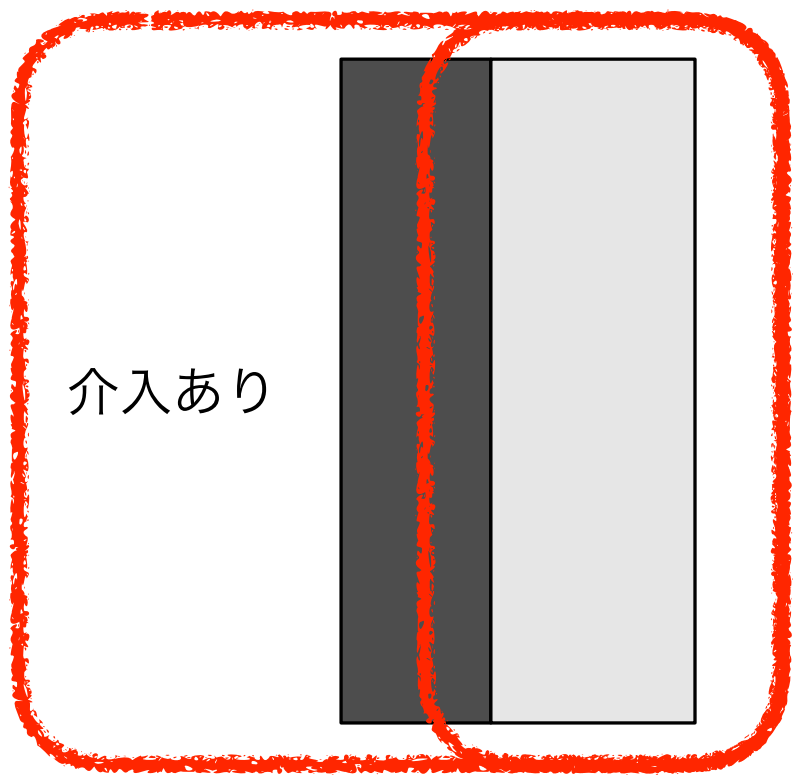




100%換算（理論研究37本以外計413本）



100%換算（理論研究37本以外計413本）



Mizumoto et al. (2014)

- **まとめ**
 - **実践報告が少ない**
 - **探索型が多い（しかも増えている）**
 - **質的アプローチがとても少ない**
 - **介入研究は少ないが増えている**

本題

中部地区英語教育学会（CELES）の場合
浦野他 (2012)

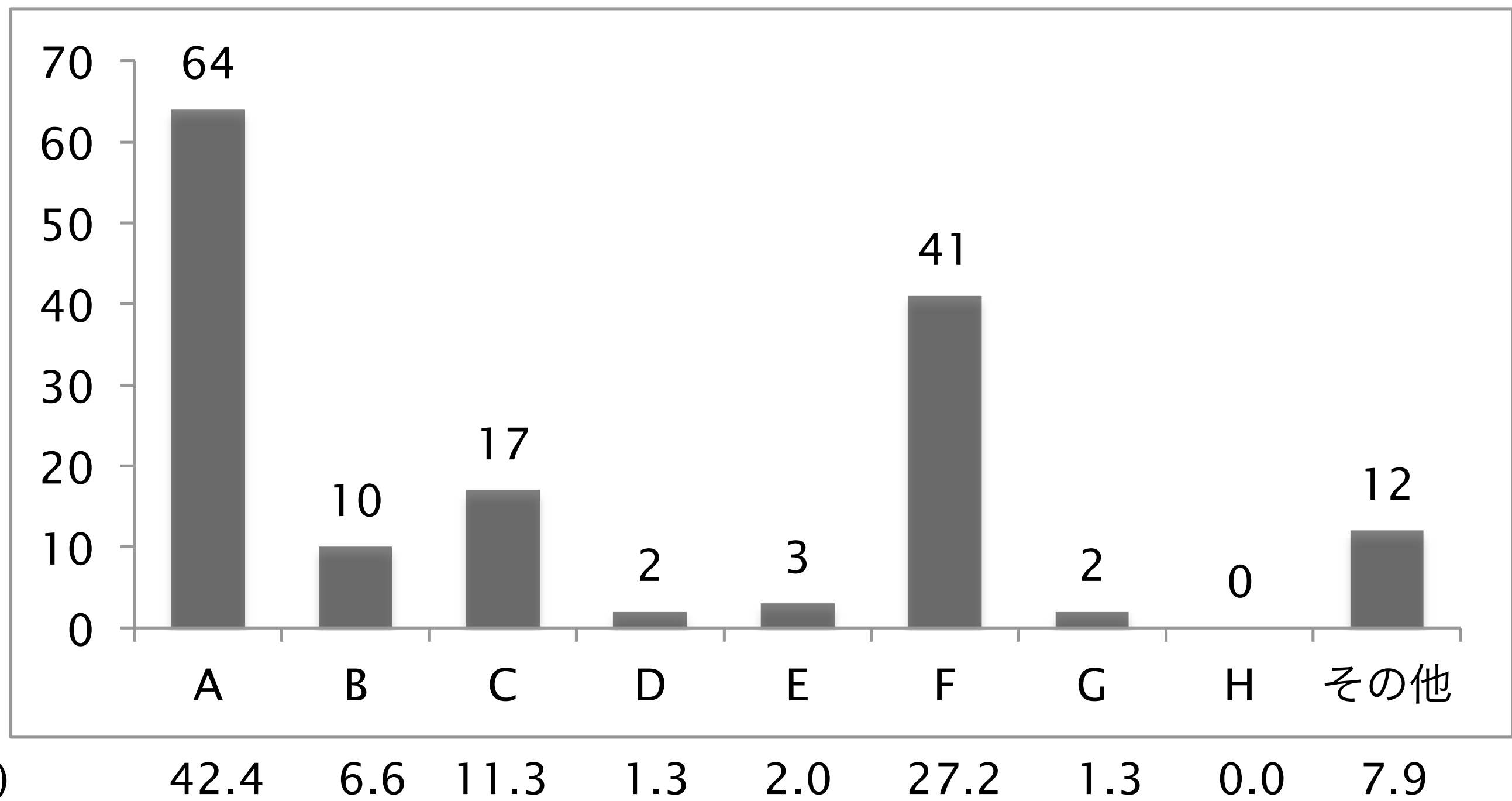
浦野他 (2012)

- 中部地区英語教育学会紀要第36～41号に収録された全論文のうち実証研究151本を分析

浦野他 (2012)

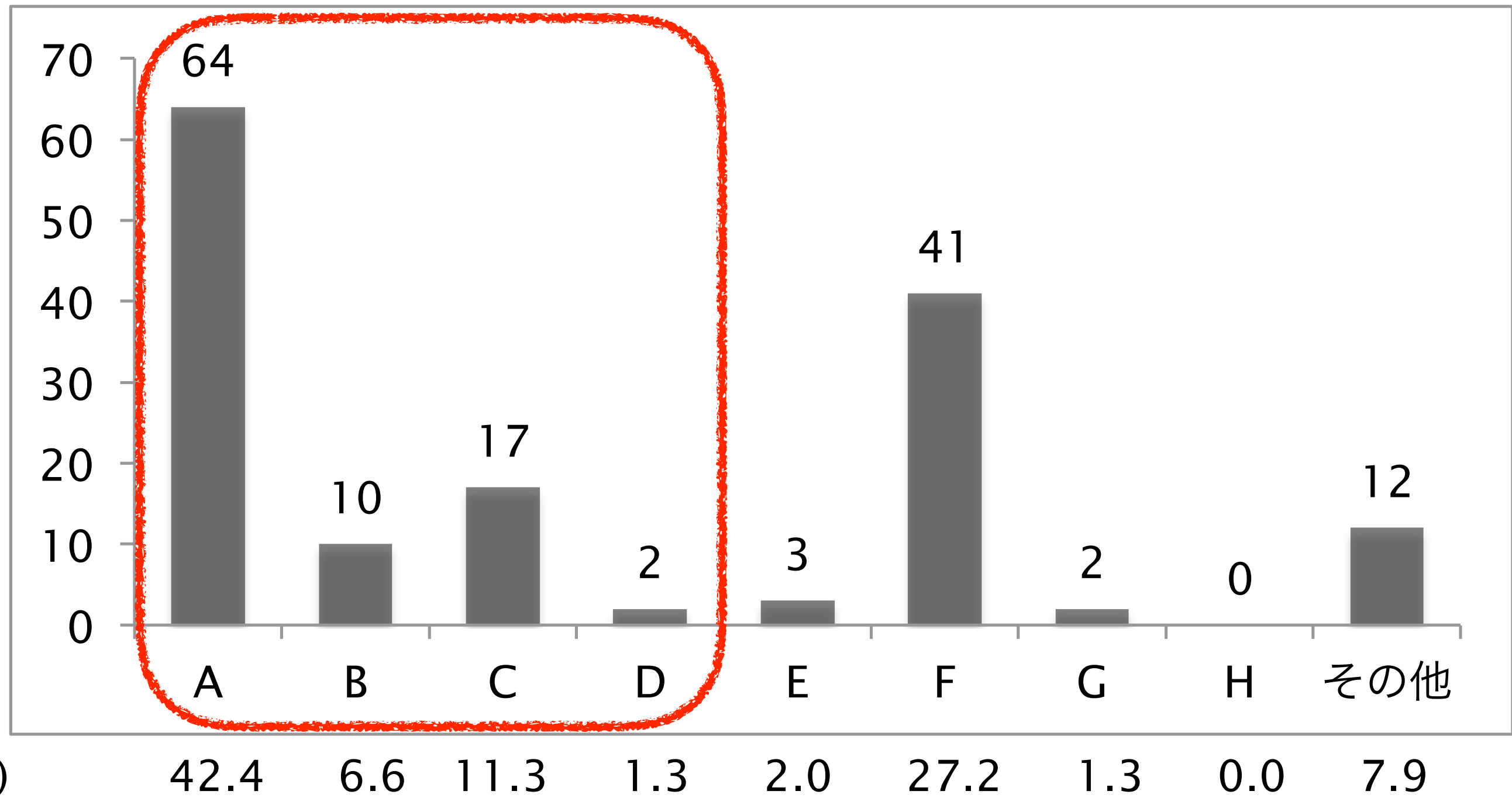
- 研究の目的（探索・検証）
- データ（量・質）
- 研究の結論（探索・検証）

タイプ	目的	データ	結論	特徴例
A	探索	量	探索	アンケートやテストに基づくパイロット的研究
B	探索	量	検証	概念の構成的・操作的定義が不十分；仮説が不明瞭なのに量的データで検証をしてしまっている
C	探索	質	探索	インタビューや観察に基づく、記述的研究
D	探索	質	検証	結論が飛躍し過ぎのタイプの研究
E	検証	量	探索	検証のためのデータが不十分か、課題の絞り込みや操作的定義が十分ではなくて、探索に終わったタイプ
F	検証	量	検証	典型的な仮説検証型の実証研究
G	検証	質	探索	Eと同様で、質的データを主とする研究
H	検証	質	検証	メタ言語的記述テストや構造化観察に基づく研究



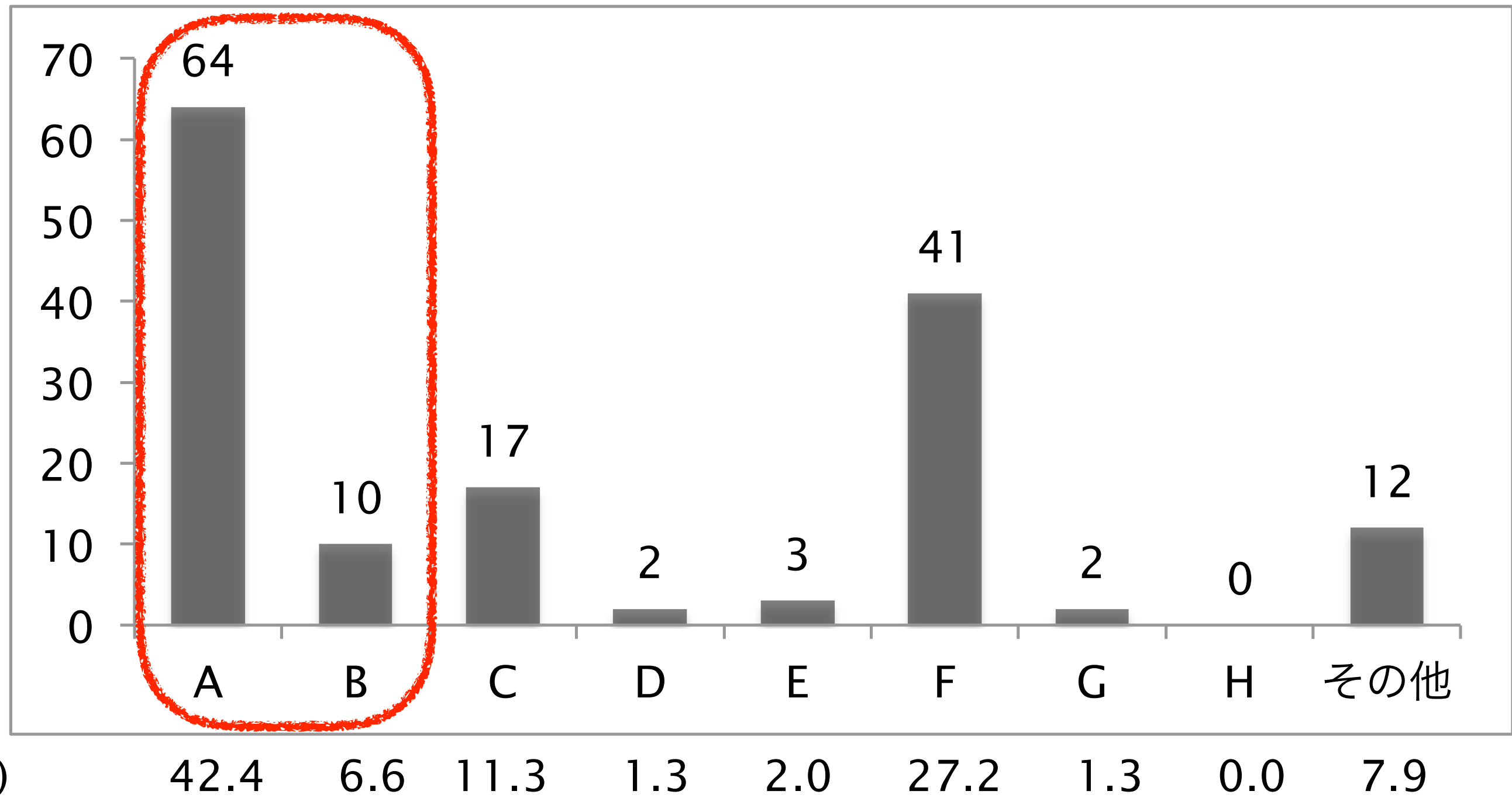
タイプ	目的	データ	結論	特徴例
A	探索	量	探索	アンケートやテストに基づくパイロット的研究
B	探索	量	検証	概念の構成的・操作的定義が不十分；仮説が不明瞭なのに量的データで検証をしてしまっている
C	探索	質	探索	インタビューや観察に基づく、記述的研究
D	探索	質	検証	結論が飛躍し過ぎのタイプの研究
E	検証	量	探索	検証のためのデータが不十分か、課題の絞り込みや操作的定義が十分ではなくて、探索に終わったタイプ
F	検証	量	検証	典型的な仮説検証型の実証研究
G	検証	質	探索	Eと同様で、質的データを主とする研究
H	検証	質	検証	メタ言語的記述テストや構造化観察に基づく研究

61.6%



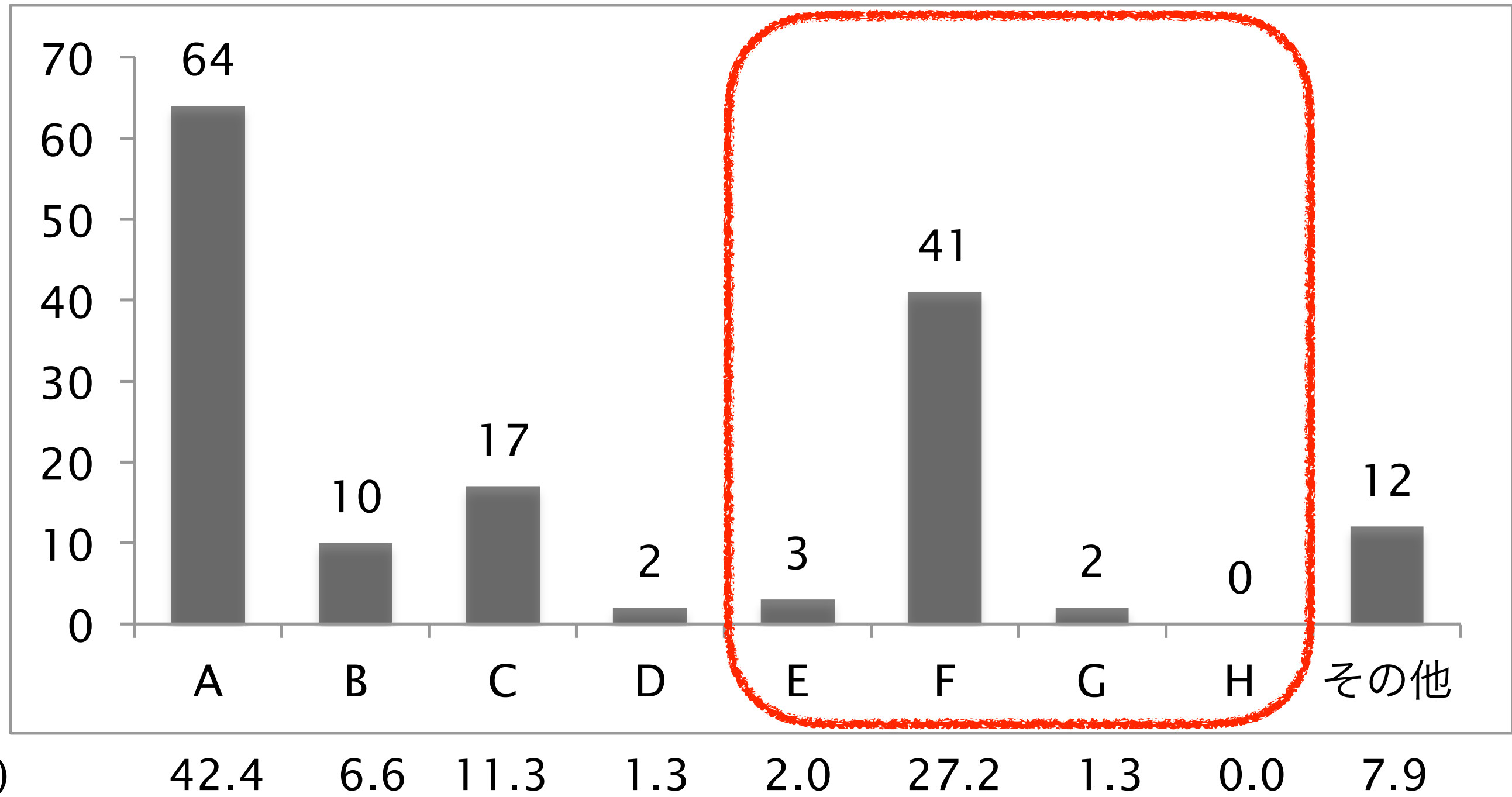
タイプ	目的	データ	結論	特徴例
A	探索	量	探索	アンケートやテストに基づくパイロット的研究
B	探索	量	検証	概念の構成的・操作的定義が不十分；仮説が不明瞭なのに量的データで検証をしてしまっている
C	探索	質	探索	インタビューや観察に基づく、記述的研究
D	探索	質	検証	結論が飛躍し過ぎのタイプの研究
E	検証	量	探索	検証のためのデータが不十分か、課題の絞り込みや操作的定義が十分ではなくて、探索に終わったタイプ
F	検証	量	検証	典型的な仮説検証型の実証研究
G	検証	質	探索	Eと同様で、質的データを主とする研究
H	検証	質	検証	メタ言語的記述テストや構造化観察に基づく研究

49.0%



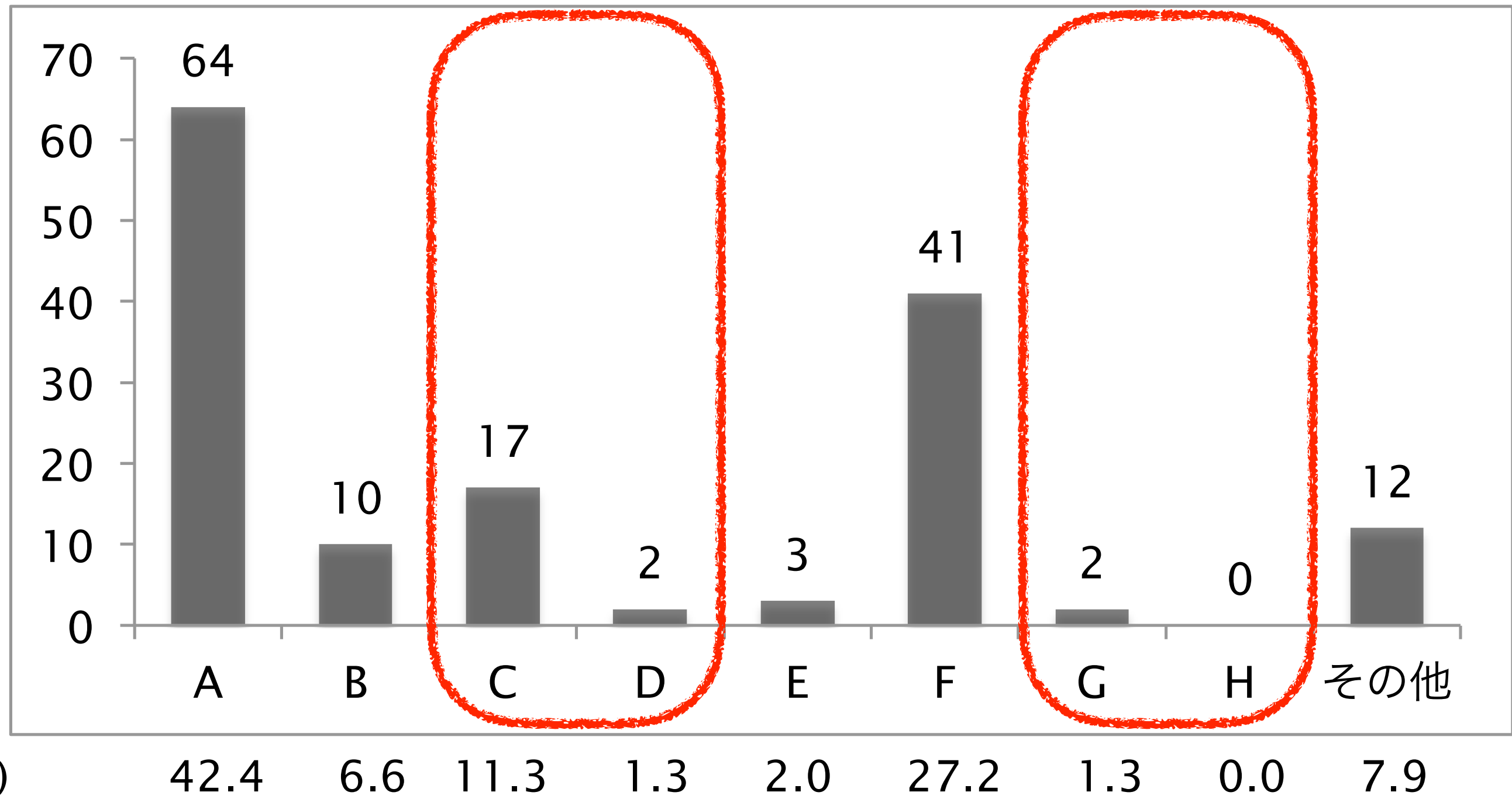
タイプ	目的	データ	結論	特徴例
A	探索	量	探索	アンケートやテストに基づくパイロット的研究
B	探索	量	検証	概念の構成的・操作的定義が不十分；仮説が不明瞭なのに量的データで検証をしてしまっている
C	探索	質	探索	インタビューや観察に基づく、記述的研究
D	探索	質	検証	結論が飛躍し過ぎのタイプの研究
E	検証	量	探索	検証のためのデータが不十分か、課題の絞り込みや操作的定義が十分ではなくて、探索に終わったタイプ
F	検証	量	検証	典型的な仮説検証型の実証研究
G	検証	質	探索	Eと同様で、質的データを主とする研究
H	検証	質	検証	メタ言語的記述テストや構造化観察に基づく研究

30.5%



タイプ	目的	データ	結論	特徴例
A	探索	量	探索	アンケートやテストに基づくパイロット的研究
B	探索	量	検証	概念の構成的・操作的定義が不十分；仮説が不明瞭なのに量的データで検証をしてしまっている
C	探索	質	探索	インタビューや観察に基づく、記述的研究
D	探索	質	検証	結論が飛躍し過ぎのタイプの研究
E	検証	量	探索	検証のためのデータが不十分か、課題の絞り込みや操作的定義が十分ではなくて、探索に終わったタイプ
F	検証	量	検証	典型的な仮説検証型の実証研究
G	検証	質	探索	Eと同様で、質的データを主とする研究
H	検証	質	検証	メタ言語的記述テストや構造化観察に基づく研究

13.9%



浦野他 (2012)

- 探索を目的とする研究が多い
 - 特にアンケート調査を中心とした量的研究が目立つ
 - 逆に仮説検証を目的とする研究が少ない
- 質的データを扱った研究が少ない

浦野他 (2012)

- 探索型が多く、検証型が少ない
 - 研究成果の集約が進まないおそれ
 - 検証型研究が増えることが望ましい
 - 探索型そのものに問題があるわけではない

浦野他 (2012)

- なぜ探索型研究が多いのか
 - ページ数の制限
 - 検証可能な仮説形成までの流れを作れない
- 研究の質の問題
 - 先行研究の分析が不十分
 - 「とりあえずデータを集めました」 的研究

浦野他 (2012)

- 質的データを扱った研究が少ない
 - 質的研究法が浸透していない可能性
 - ページ数の制限が足かせになっている可能性
 - 審査体制が整っていない可能性

浦野他 (2012)

- **まとめ**
 - **適切な研究手法を選択する重要性**
 - **検証型研究を増やす必要性**
 - **質的研究を増やす必要性**

ここまでのまとめ

ここまでのまとめ

- 適切な研究課題の設定
- 研究目的に合ったデータ収集と分析

教育的示唆

教育的示唆

- 英語教育研究では、最後に「教育的示唆」を述べることが期待されることが多い
- 単一の研究から示唆を述べてもよいのか

教育的示唆

- 量的研究
 - 一般化可能性が担保されていない場合、本来なら研究結果は一般化できない
 - 同じことを別の文脈で行っても、同じ結果が得られる保証はない
 - 再現性（reproducibility）問題

教育的示唆

- 再現性（reproducibility）または再現可能性（replicability）問題
- 心理学分野で大規模に行った追試研究で、同じ結果が再現されたのは4割以下だった（日本社会心理学会広報委員会, 2016）
- 英語教育分野ではどうか（考えたくない）

教育的示唆

- 質的研究
 - 研究結果が文脈に依存するため、
そもそも一般化は行わない
 - 厚い記述を行うことで、研究結果が別の
文脈でも当てはまるかどうかの判断を
読者に委ねる

教育的示唆

- 英語教育研究において、単一の研究から過度な一般化（教育的示唆）を行うのは不適切
- ではどうする？

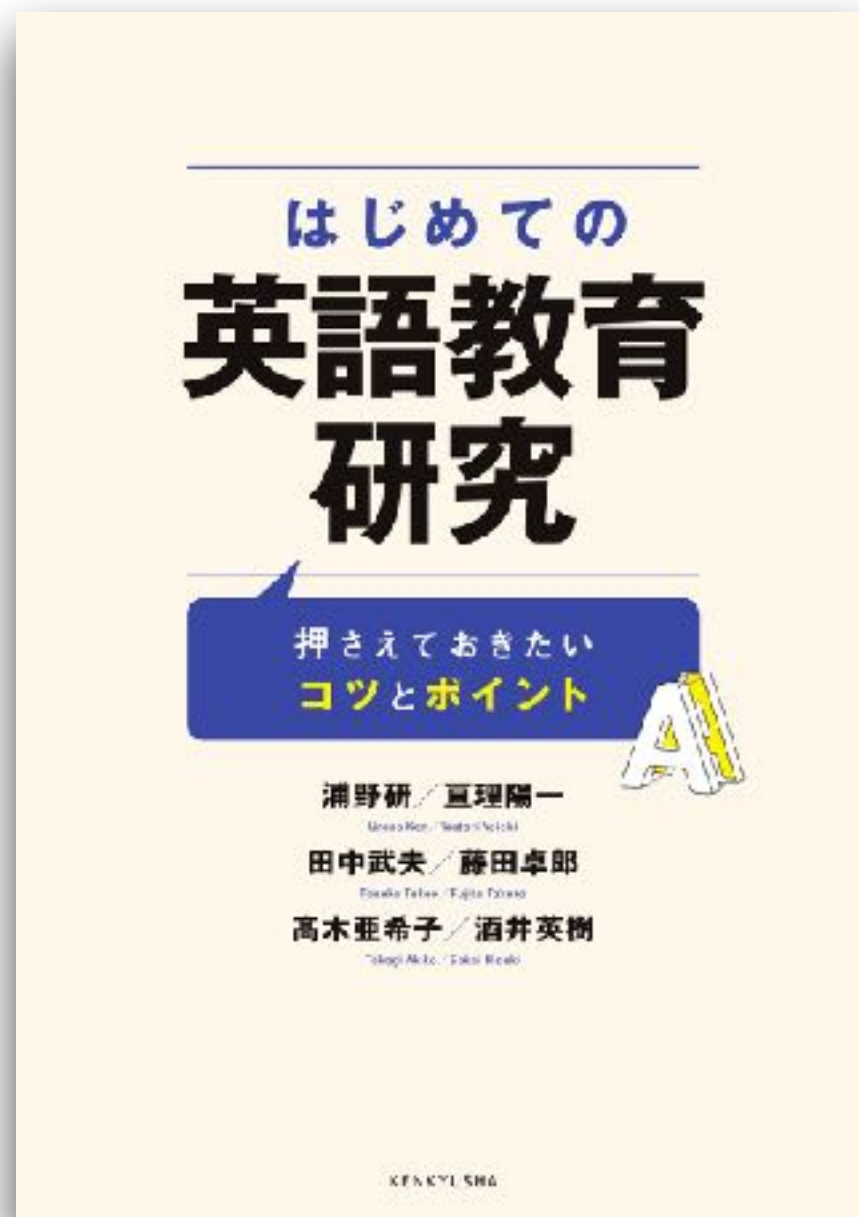
教育的示唆

- 研究の限界を真摯に受け止め、教育的示唆はできるだけ conservative なものに留める
- 大きな教育的示唆は、個々の研究ではなく、複数の関連研究の結果をまとめた形で行う
 - 研究の統合（research synthesis）とメタ分析（meta-analysis）
 - 追試（replication）の重要性

教育的示唆

- 統合・追試に耐えうる研究を行うことが重要
 - 研究価値の高いテーマ
 - 追試を行うための情報開示
 - 記述統計量の開示
 - （できれば）無作為割付のデザイン

主な参考文献



- はじめての英語教育研究：
押さえておきたいコツと
ポイント（研究社）
- 研究の方法論について、多く
の実例を紹介しながら解説し
ています

主な参考文献



- 外国語教育研究ハンドブック
- 質的・量的研究の両方について丁寧に解説されています

全体のまとめ

全体のまとめ

- 実践としての研究と学術的な研究
- 研究の3要素（研究課題、データ、解釈）
- これまでの研究の概観
- 一般化と教育的示唆の難しさ
- 研究の蓄積の重要性

Ken Urano

urano@hgu.jp

<https://www.urano-ken.com/research/jacethokkaido2018>

引用文献

- 藤田卓郎. (2016). よりよい実践研究を行うための10のポイント. 第46回中部地区英語教育学会三重大会・英語教育研究法セミナー. Retrieved from: <https://drive.google.com/file/d/0B-OpnEJKrYAdQzNRb1pDY0pQaUE/view>
- Mizumoto, A., Urano, K., & Maeda, H. (2014). A systematic review of published articles in *ARELE* 1–24 : Focusing on their themes, methods, and outcomes. *ARELE*, 25, 33–48. https://doi.org/10.20581/arele.25.0_33
- 日本社会心理学会広報委員会. (2016). 心理学研究の再現性に関する論争. Retrieved from: <https://sites.google.com/site/jsspapr/home/reproducibility>
- Nunan, D. (1992). *Research methods in language learning*. Cambridge University Press.
- 竹内理・水本篤 (編). (2014). 『外国語教育研究ハンドブック: 研究手法のより良い理解のために (改訂版)』 東京: 松柏社.
- 浦野研・酒井英樹・高木亜希子・田中武夫・藤田卓郎・本田勝久・亘理陽一. (2012). 英語教育研究法の過去・現在・未来. 第42回中部地区英語教育学会岐阜大会・課題別研究プロジェクト.
- 浦野研・亘理陽一・田中武夫・藤田卓郎・高木亜希子・酒井英樹. (2016). 『はじめての英語教育研究: 押さえておきたいコツとポイント』 東京: 研究社.
- 吉田達弘・玉井健・横溝紳一郎・今井裕之・柳瀬陽介 (編). (2009). 『リフレクティブな英語教育を目指して: 教師の語りが拓く授業研究』 東京: ひつじ書房.